

子育て主婦とキャリアの見通し

○里村和歌子（九州大学）

背景と研究目的

主婦とは、1) 夫の稼ぎに経済的に依存し、2) 無償で家事労働をおこなうことに責任を持つという二つの要素を満たした既婚女性である。

現代女性にとっての就労のウェイトは、産業構造の転換による家族のあり方とライフスタイルの変化、女性の労働者化、フェミニズムの浸透などの影響によって大きくなってきていると考えられる。一方で、育児期の女性は正社員になることを望んでいないという統計結果がある（内閣府『男女共同参画白書』2019）。出産・育児期を経ても就労を継続する大企業や官公庁の正社員と中断再就職型の非正規労働者という女性労働者の二極化が指摘されているなか（岩間 2008）、本報告では、育児期女性のうちパートなどの非正規労働者を含む主婦を「子育て主婦」と設定し、彼女たちがさまざまな社会的条件のなかでキャリアをどのように見通し、実践しようとしているのかを明らかにすることを目的とする。

研究方法

分析対象は全国家族調査 18 質的調査インタビューデータセットである。全 101 ケース中子育て班データは 23 ケースあり、本報告で主に用いるのは子育て主婦 12 ケースである。子育て班の対象者の設定は①28 歳から 50 歳までの女性で、②15 歳までの子どもがおり、③親（義理の親を含む）と同居していないかたとしている。本報告では、子育て資源（夫、親、制度）と希望就労形態、家庭の悩みを抽出し、子育て資源をスコア化した一覧表を作成し、語りの位置づけを検討した。

結果の概要

一覧表による語りの分析では、子育て主婦にとっての望ましい就労のかたちは、未子の手が離れる時期（就学後）の家計補助的就労であることが明らかになった。そこで、なぜ専業主婦のままという選択肢が見えてこないのかという問いが生まれた。第二波フェミニズムや第三次主婦論争、生活者運動論など、主婦は資本主義に対抗するオルタナティブな足場として位置づけられた経緯があるが、今回の語りからはそのような積極的な意味づけを読み取ることができなかった。一方で、周囲との絶えざる比較のなかで、主婦として社会から取り残されていること、子育てがうまくいかないことなどが日々確認され、主婦という自己定義や規範から逃れる手っ取り早い方法が、私的領域の外での就労であると見なされていることがいくつかのケースで確認された。とはいえ、ポストフェミニズム的な市場での勝ち組になることは、子育て資源が欠乏するなかでのケア責任、年齢、中断されたキャリアなどの社会的条件によって困難である。「貧困専業主婦」「逸失利益 2 億円」（周 2019）という指摘がありながらもなお、子育て主婦たちが「身の丈」の就労のかたちを求める結果として、男性片働きモデルを維持しつつ周辺労働市場に吸収されていくさまがうかがわれた。

【参考】

岩間暁子, 2008, 『女性の就業と家族のゆくえ』 東京大学出版会.
周燕飛, 2019, 『貧困専業主婦』 新潮社.

（キーワード：主婦、家事労働、中断再就職）